

那珂八幡古墳確認調査（那珂遺跡群第 175 次調査）現地説明会資料

平成 31 年 2 月 16 日（土）

福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課

1. 調査の成果

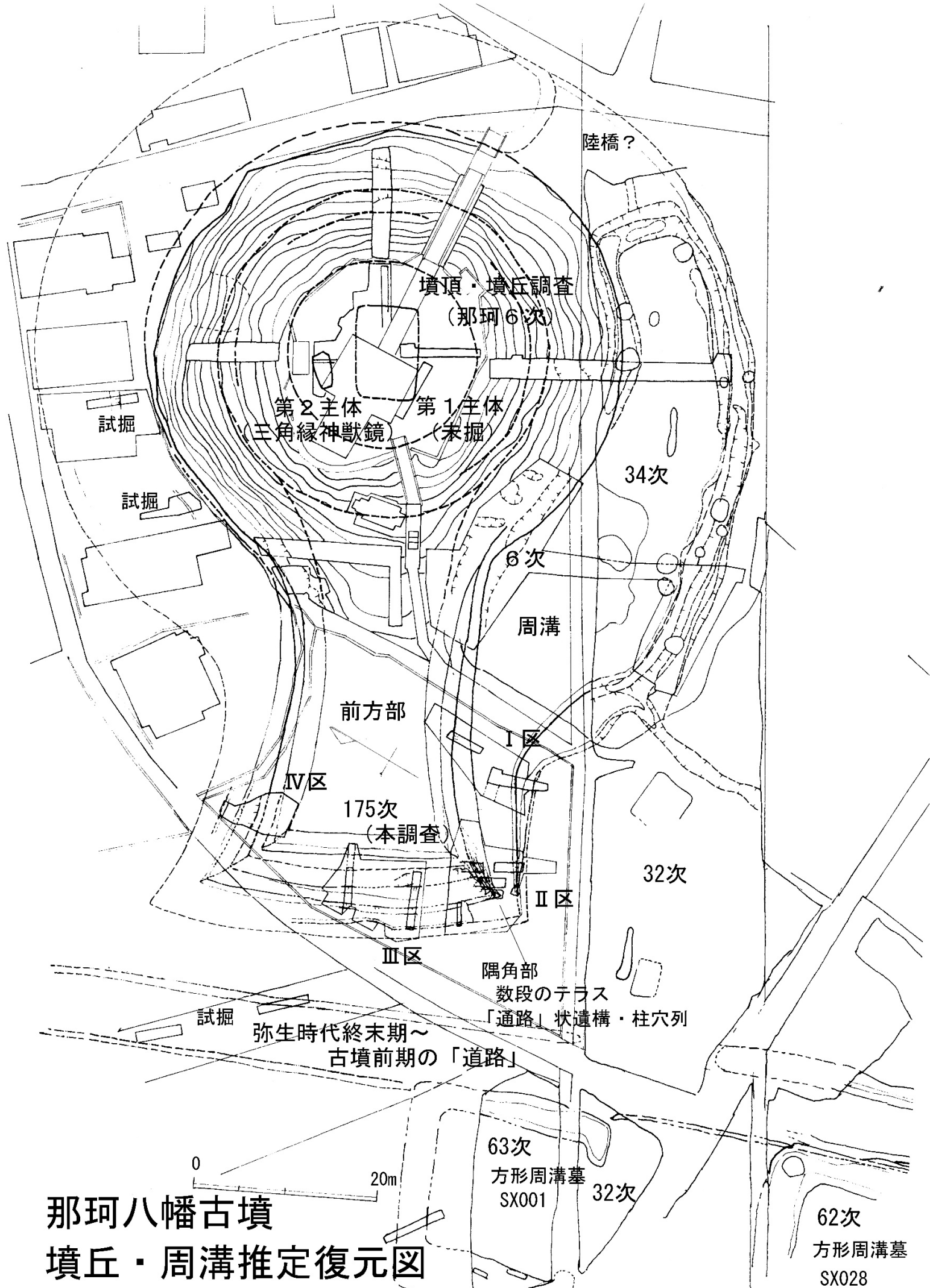
- ①以前の発掘調査や試掘調査では不明確だった前方部周溝の形状や規模がより明確になり、古墳全体の規模、形状がより正確に推定できるようになった。
- ②推定される古墳の規模は、全長 86.0～86.4m、後円部径 51.5～52.5m、前方部長 34.0～34.4m、前方部前端幅 32.0～32.7mである。（全長は前方部前端線（周溝下端）の判断が難しく、推定値。）
- ③古墳全体の形状は、当初推定されたいわゆる「纏向型」（後円部径：前方部長＝2：1）ではなく、後円部径：前方部長＝8：5 の、北部九州に多い類型である。
- ④前方部南側側縁部の形状は直線的ではなく、後円部から一度細くくびれて隅角部に向かってゆるやかに広がる。この形状は比較的古い古墳に多い。
- ⑤前方部前端の形は直線的ではなく、おおむね弧状を描くと考えられる。これは、出現期の古墳に多い特徴である。
- ⑥前方部南側隅角は、稜線の南側（側縁側）に数段の平坦面があり、上部の狭いテラスには柱穴列があることから、その下の平坦面は「通路」とも考えられる。前方部ないし「突出部」に通路状の施設を持つものは、出現期の前方後円墳や弥生時代後期後半～終末期の「墳丘墓」にある。那珂八幡古墳が「弥生墳丘墓」から「古墳」への過渡期に築造されたことを示唆している。
- ⑦前方部南側周溝外縁部は、斜面途中に平坦面がある 2 段掘りで、後円部南側周溝外縁部で確認された状況と類似している。

2. 調査成果からみた那珂八幡古墳の意義

- ①古墳の時期は、墳頂部や後円部南側周溝下層から出土した土器から、古墳時代初頭、あるいは弥生時代終末期から古墳時代初頭の過渡期の時期のもので、福岡平野あるいは九州最古の古墳の可能性はある。
- ②今回の調査により、「纏向型」とも推定されてきた那珂八幡古墳は、それとは異なる墳丘比率（後円部径：前方部長）であることが事実となった。

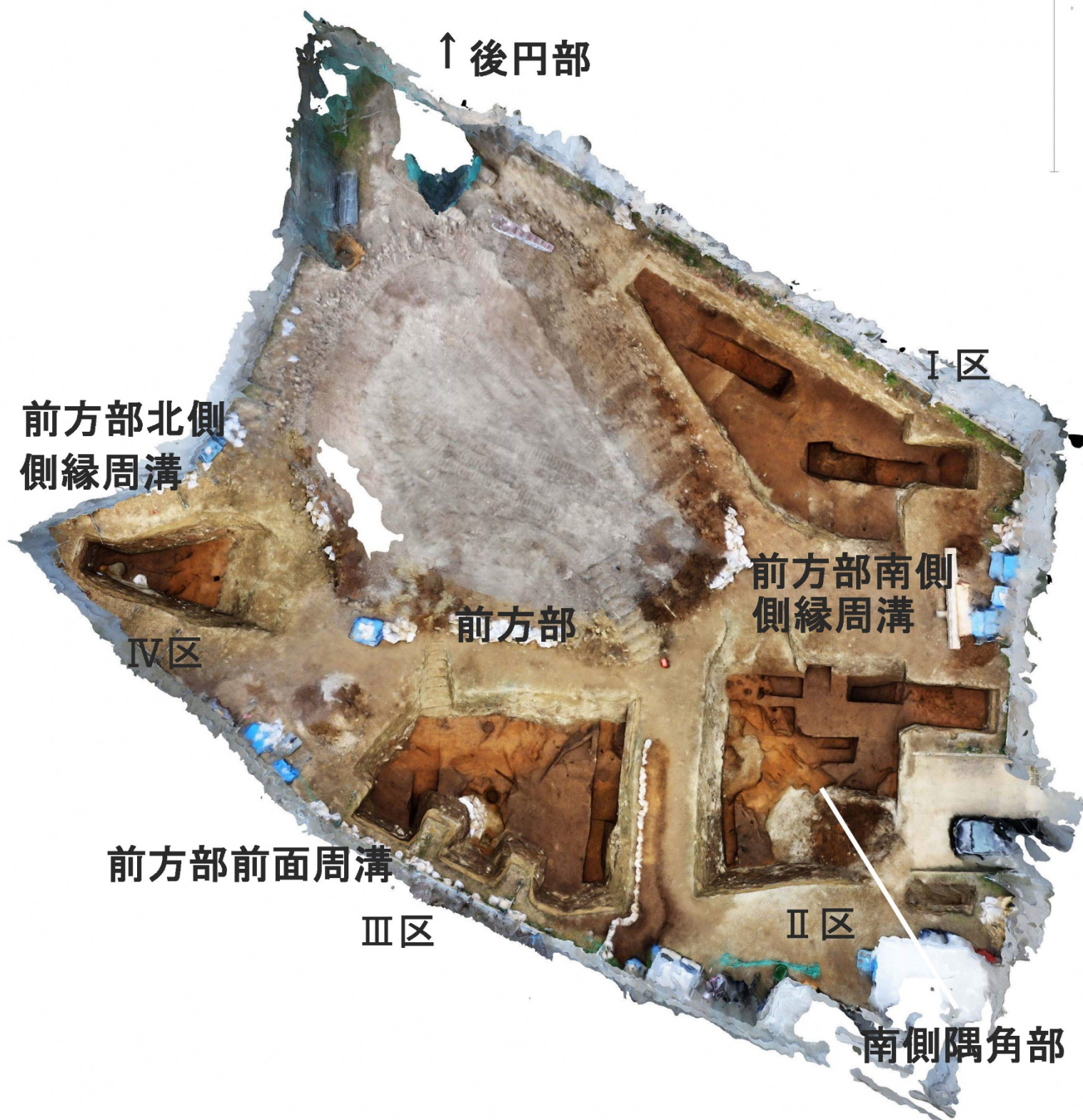
「8：5」という比率は、北部九州の有力な前期古墳の多くに採用されている。那珂八幡古墳は、より古い段階の築造であり、時期的にこれらの墳丘規格の祖型となった可能性がある。

今回の調査は、各地の古墳成立の過程や、古墳出現期のネットワークを今後検討する上で非常に重要な調査成果となった。



那珂八幡古墳
 墳丘・周溝推定復元図
 および周辺図 (1/500)

※現時点での推定素案であり今後修正・変更の可能性がある



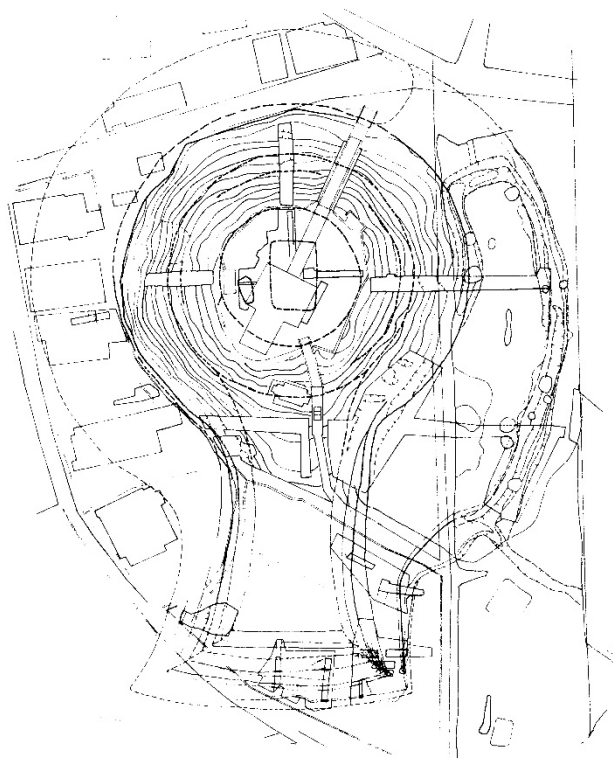
那珂175次調査（那珂八幡古墳前方部確認調査）
三次元合成画像

協力・作成・提供：
九州文化財計測支援集団
（代表：永見氏）

＜参考図＞



（「纏向型」をモデルとする案：概報段階・文献①に加筆）

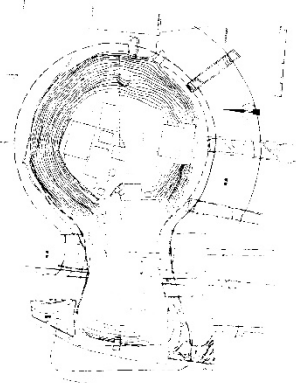


那珂八幡古墳の従来の復元案（左）と、
今回の調査に基づく復元案（右）

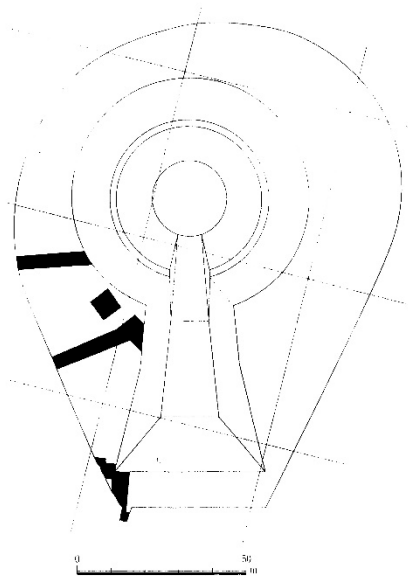
文献①：井澤洋一編 1986『那珂八幡古墳 昭和 59・60 年度の
重要遺跡確認調査及び緊急調査概報』福岡市埋蔵文化財調査
報告書第 141 集

文献②：西垣彰博編 2006『戸原王塚古墳』粕屋町文化財調査
報告書第 23 集、粕屋町教育委員会

那珂八幡古墳と
類似する古墳
（粕屋町戸原王塚古墳）
※上の図と同一縮尺

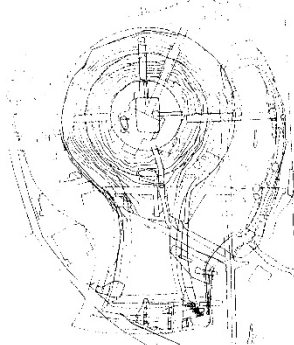


（戸原王塚古墳；文献②）

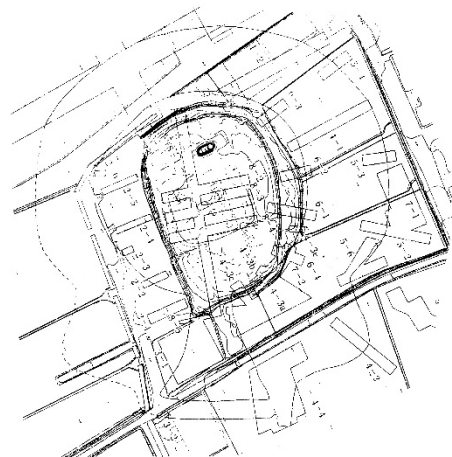


勝山古墳

（文献③）



那珂八幡古墳
（上の図の1/2）



纏向石塚古墳（文献④）
（「纏向型」の典型）

纏向諸古墳と那珂八幡古墳の比較 （同一縮尺）

文献③：豊岡卓之編 2011「Ⅲ. 勝山古墳第 5・6 次調査報告」平成 19 年度～平成 22 年度科学研究費補助金 基盤研究(A)『東アジアにおける初期都宮および王墓の考古学的研究』（課題番号 19202025）研究成果報告書、研究代表者：寺沢薫

文献④：橋本輝彦編 2006『東田大塚古墳—奈良盆地東南部における纏向型前方後円墳の調査—』桜井市内埋蔵文化財 1998 年度発掘調査報告書Ⅰ、（財）桜井市文化財協会